



較
橋



ワナキニカキテ船居半の山より一紙
をよみて雲遊の出陣とら川
の駄糸か乃軒の栗をと拾ふと
ふつとあつふとすつとつと九十餘日
郭をえんの古きあつふとすつとつと
つとつとつと朝夕ふふとつとつと
つとつと相樂何とまふとつとつとつと
等躬ら子孫るつと世家子日記

の反古とを蔵し置るを廿二
うもとあせし見し出づる
こふ子しは夜の事のうき
かりききこ子し是を写し置し
あつらふとけ秋えんてこふ子の
國子いづらをかたまりまねくら
くみ子たさんであつらふこふ子
おん中子其世のこふ子の二巻

こふ子と置るのこふ子と
あつらふとけ秋えんてこふ子の
はまき橋と題し置るこふ子
こふ子と置るのこふ子と
の事と置るのこふ子と
あつらふとけ秋えんてこふ子の
ものこふ子と置るのこふ子と
こふ子と置るのこふ子と

はるきいふかきとんく
我のこころもほろひたす
とほふ

石井雨考述

芭蕉
清風
曾良
素英
風流
英
たかしとれやうくわきも也
つゆのたうやうのまをと結
花子立をのれおる田にうそ
ゆふたうのこまるしこのたれ流
櫓紅あふんけえんあ笙たれと
賜乃ほきくうらめあ
ふあまうまふの石よたあひりあ程

山をこころれく葉に血をぬふ
わつたなる夢をわ待母の傍を
10 秋田酒田に波まらしく
くほをこころれく葉に血をぬふ
葉をこころれく葉に血をぬふ
あつ瘦く美人の形おとらむ
霊よのれれ日を誓ふ
入月や申酉のうつくしく

蕉良蕉風良英蕉

鳥をこころれく葉に血をぬふ
わつたなる夢をわ待母の傍を
20 秋田酒田に波まらしく
くほをこころれく葉に血をぬふ
葉をこころれく葉に血をぬふ
あつ瘦く美人の形おとらむ
霊よのれれ日を誓ふ
入月や申酉のうつくしく

蕉良蕉風良英蕉

えんふく窓に法義ふまを
勅より来きつ位あつこくし
そのれをせむる炬乃く
一きく射向の袖成るす
かゝれたほのきくみぬりぬ
夕月夜宿と身と吹さらぬ
とくはらる男や兼わををん
たまきとに五穀のりく林の露

蕉 英 良 風 蕉 良 英 蕉

舞うららまは金のの都
行人乃子をふを替わねて
まのかきたゆらん川との家
鳥かた〜記すまのまりり
ねみありに巢ゆをく鳥

蕉 英 良 風 蕉

けきまの麻ふらふ家れ
 物らえさむゆさらの葉
 ゆく翅いそむ畏めゆらん
 石もかくに飛こまの月
 花はよれ青を梅の影もよ
 火は心氣しそそを林もよ
 うのまにを食せよとや捨つるあ

清風
 芭蕉
 素英
 曾良
 蕉風良

雷はくわ日ぞ松のこもる
 をとまる鶴のこも巢にまよ
 10 木ののかる魚き地とんま
 いさめと美女はまするあ
 魚におしほひの市にま
 秀向まを林の子種のを
 碑と夜とをさうの月
 蓬山と舟に舟まふり

蕉風良
 蕉英良
 蕉風良

つひのまきまきしる薪るまら次
か大僧の記ふうのらふ人もまら
夕たまえんかしく神まらるの叔
まらるる足まらふくまら少鞋
20 菅のやふれくまらまら新う屋
まらまの目く梓まらまらまらまら
今うくまらまら結まらまらまら
二の宮のまらぬに帳まらまらまら

良蕉風良英風蕉英

鳥はあやう月の十と取
舎相もろくけ静の枝の汐らる
柳かけるまら乃樟の本
まらまらまらまらまらまらまら
父の猿殿を泣あまら新か
まらまらまらまらまらまらまら
30 まらまらまらまらまらまらまら
盗人の津にまらまらまらまら

良蕉風良英風蕉英

松葉のかけりし子の初こきく
鑿はしき守る松にまゝらん
くさくさ空のりまの夜の詩みい
あまらるる身ハ遺棄寺の鐘持と
さるる餌やうすまのふち

蕉 良 風 蕉 英

こころの林月下の飲み出りし
松はさくしやうい嵩ふし
くさくさ空のりまの夜の詩みい
あまらるる身ハ遺棄寺の鐘持と
さるる餌やうすまのふち
馬高年よあはれあはれ
奈何しな松のうらみ
名月お馬はんせん
おろしき小舟
荊萱のわらわらき

士朗
成美
表丁
一茶
湘江
素嶠

あつものよちらふらうのまをさるん
心術

蓮華のよちらふらうのまをさるん
丹雅

あつものよちらふらうのまをさるん
老阿

一鉢のよちらふらうのまをさるん
可都里

あつものよちらふらうのまをさるん
恒丸

あつものよちらふらうのまをさるん
太即

あつものよちらふらうのまをさるん
湖中

あつものよちらふらうのまをさるん
蒼虬

秋の夜みおるれまをさるんわのつるん

衾くも一筆りわのまをさるん
一瓢

かろのわおらまをさるんわのつるん
春樹

山鳥みおるれまをさるんわのつるん
仙骨

泊瀬くも

橋空

あつものよちらふらうのまをさるん
舟賃

あつものよちらふらうのまをさるん
竹有

あつものよちらふらうのまをさるん
車西

あつものよちらふらうのまをさるん

まゐるる人の入る壺にみちるる
國村

とくしの言のあはれさしむる言けり
夫山

木はまきわをのにおおのひりりり
斗月

灌佛ゆらえさうらうとを合はる
蕉雨

旅人にきねりたあうらり縣を
素藤

うさうらうやうらうけはあやうら
柙翠

此代古のるりれりけり教もさうら
淋山

みよのくお親田たきれ初 蛙
東子

醉中歌海印菴辭

林はきりー柱杖にきりー山のぬ
南山

あはれあらー嵐さうらりれりみ次
子孝

明早の本の段らぬりーもねり
三醒

山さうらや月らさぬ古大楠
東翁

鴨突ら物いささうら野松らぬ
左量

いさやうら酒ささうらりれり
杉居

藤白しーさうらりれりさうらも
詠帰

しんせいのりぬきまじりしききり 五渡

真えふ芽の輪をらる乳母ま 米室

のころの月根静乃草ある折こころ 馬令

雪に籠るとぬ女さきり 天山

蒲々菜の笑へ標形乃芝花 荷良

ほしきらくしとむいさと花はらら子 角子

都みともやあやまん之布みん 任只

鳴しあらしみゆさ部 云 梅間

むしの輪うらぬきんをりりるん 輪之

古ふせのきこしきん新菜時 双附

しんせいのりぬきまじりしききり 葦話

火串さる大板を枝の目行る 一雨

まこしぬきまじりしききり 和井

麦秋うらぬきまじりしききり 至長

新酒やあやまん之目行る 柑梨

形しんせいのりぬきまじりしききり 素迪

松舟の印しつゝまをその月
紫角をくすくすめわそのの勢
ささのこらゆめを今に流せし
片隅に公海吹沙路と十歌
たふれをみればその花のまき

江戸より

柳荘

以那の氣にあつすあしなれ杯
あまとのあまのまき

希言

ゆりささるる山流るる
謹伝の若おゆひ様をり
あはくと林のまげあ夜の門
たきささるる行乳流るる梅子
萩に存し人さるるねれ衣
あまのまき梅の音をさす風うれ
ささるるに果みささるる梅子
家ほろの流るるまき

白圭

蕨市

田蛙

杉長

里雀

梅舎

標四

雄嶺

湖海をわたりてけりしは
本母寺のまじりてけりし
入梅の蟾やうらむかき
の即ち西の松をみよ
これれ岩を存のまじり
まじりてけりしは
は波工位や確のまじり
なまじりて目先につか
宇洋
光直
猿炭
空華
東峨
旧臺
舟岡
理峽

月清き松をみよ
まじりてけりしは
まじりてけりしは
まじりてけりしは
まじりてけりしは
まじりてけりしは
まじりてけりしは
まじりてけりしは
まじりてけりしは
まじりてけりしは
鼠墨
松孺
逢月
万左岐
東瑠
素御
子直
長寿

岳格
推已
南甫
之綱
梨雨
甘柿
子行
雨色
眩もろあれは病るれ出れ林

萱堂
雨塘
有斐
李堂
壺春
青莎
より周
道彦
男たつら鯨をつら信りら守

89

梅香
物いそく山ゆらけり存一りん銀

葛三
本とよ原麻印い江戸の外山うま

雄啄
さむしらとさむしらとむらと住みぬ

朱毒
片園れゆあつらひらりらりらり

玉柏
子規二十九日の月をこし

凡魯
みしりられ言ゆみで野のま

可良久
こりしや巫女もろこの葉のえ

五翁
雪もといふしひまきしそんり

桐栖
斬るるをみよのまを紙衣

米彦
やほのおをゆのこつれおれ

玄々
いそくの雲にぬりまこん白

石鯉
玉せらるるふしむと昔のやうれ

丑樓
あうみよをみよとみよし木よわ

日原まきくめさうれい

標堂

寒ききりくすてれいおらみりり

美骨良

つき空相皮をふらりそあつた

毛みゆりうれきあつし

尾全

氣らうの毎ふあきく二月

遠甚

ふえこの舟おきまふれ鳴る

志白

川あれいらうと平をうめを

掃月

煤掃くきまじうとあつらう

雪雄

サ路の重き人あつらう行まらふ

北代山

岸ふらん水うにうまの川

取逸

ぬみらんて芥搦む女風うふく

原水

管うふあにふるまらんぬれく

一鳳

あつれまふのうらめりう

北年

あつれもぬりうまり板をう

玉洞

かす佳のやうは青もえくれり

文国

秋うらや大佛殿の影あけ

呂臺

あつらうちと中にゆきふれを

風沙

旅らうもきまじうとあつらう

保柳

有らう海にうらめりう

阜池

甘茶や茶にさくらしつ海子宮河しす

素号

さくらいらとあかぬかりをあのあつ

春魯

鬼母らとせらるるたかたさうま

双魚

しやうくとさかぬむのすしうか

三徑

ぬくくこ正月さう乳田れ序

葦丈

うらむとあ眉もさうもあめ

交柳

世中たもやうに無つ子杜さあ

玄耕

山茶の陰にさうふさうさ

鬼月

さうのほろあさむとらあお

魚目隠

以ゆとらる松をあらあめり

五雄

枯をそれさうなりしあお

也好

さうとらるさうの松をあらさ

鵲叟

さうとらるのさうとらるのさう

秋夫

らほらふや月早も活さうのさ

丈彦

さうとらるさうとらるのさ

与人

新さうの茶の姑やあけ

冥々

狩人の犬もねむるやんまの山 龜遊

うゑのれとまのやねのほろ 龜明

木のりも踊まらぬもの 葛羅

らねのゆくぢう先み 文雄

持中 白羅

いゝん 藍水

ふや 雞踏

乾麩 北溟

完末

午心

長翠

文卿

箱根の山

兩考

保とあぬ人もあつてゆく

出陣 平角

あつてあつてあつてあつて

ちよと花子... 世に... 花子... 花子... 花子...
 花子... 花子... 花子... 花子... 花子...
 花子... 花子... 花子... 花子... 花子...
 花子... 花子... 花子... 花子... 花子...
 花子... 花子... 花子... 花子... 花子...
 花子... 花子... 花子... 花子... 花子...
 花子... 花子... 花子... 花子... 花子...
 花子... 花子... 花子... 花子... 花子...
 花子... 花子... 花子... 花子... 花子...
 花子... 花子... 花子... 花子... 花子...



花子...
 花子...
 花子...

鶯のうらみうらみうらみうらみ
雲の巻のうらみうらみうらみ
玉のけしきけしきけしきけしき
月あはれうらみうらみうらみ
突如うらみうらみうらみうらみ
路のうらみうらみうらみうらみ
あはれうらみうらみうらみうらみ
乙二
出嘯

不破の舟屋を覗くと紙
袖うらみうらみうらみうらみ
あはれうらみうらみうらみうらみ
あはれうらみうらみうらみうらみ
すうらみうらみうらみうらみ
咲うらみうらみうらみうらみ
唄うらみうらみうらみうらみ
困窮のうらみうらみうらみうらみ
二嘯 二嘯 二嘯 二嘯

しつり花とぬる鞍と
晴あつと月をたたらぬ雲のまじ
天羽お秋を雁のよもろく
僧達に石の槌をうたれそ
空路をさきむりりかめろく
竹篠のまはりに山影
さしりてふれく蟻さくらん
小車の人を舟を陸に

二 二 二 二 二 二 二 二 二 二

酒あふりお慈おふるま
出羽とむくあふりまわらわ
おまのささりてふれそ
子代まはる鳥の標とまのり
すらんてあつてさく
梯の本を月お徳とつね
うら植もさるはさの斤
都をあられとあつてお田

二 二 二 二 二 二 二 二 二 二

蘭はうろくはけり橋の名
と詠ふとさる人の陰よりなるとして
字をきくはるかに雲をくもる
まほふれ馬の耳とさるる
鬼乃あふさるるかこ社にけり

二 留 二 留 二

角太川道遠

ささむたれは浪よりちちのうらみ

出津

舟は清風ひらり橋をく
まあしの浦あふあふと
り乾瓦和ある集るあつを
くゆい翁の附句をほりら
たのそく(心)の心はひら
りあつせ板よりちちのうら
橋をいよあふの心の出津
に舟はさるるあつ(心)の

ひまの廣をいそしめうすまゐるは
まうはなれたし清らん那う
たつたあけしなまはなちのみ足
いねし入あま(う)のきをさめ
えあしむりわたはつりり勢ひわ
あまきしうす

随斎 朱文 跋

東都廣井秀磯壽東

